

法学部・田村ゼミのビデオ作品「l' esprit en suspens ～福島とフクシマの狭間で～」

映像祭・TVF2013で優秀作品賞

福島県出身の学生たちの葛藤を見つめた法学部・田村理ゼミのビデオ作品「l' esprit en suspens ～福島とフクシマの狭間で～」(18分30秒)が1月、一般公募の映像祭「東京ビデオフェスティバル(TVF)2013」で優秀作品賞を受賞した(作品は<http://tvf2010.org/nominate/vote2013.html>で視聴でき

る)。主人公は昨年度の同ゼミに集まった3年次生(当時)の男女4人。その中の一人で、企画・制作の中心的な役割を担った法学部政治学科4年次の八巻仁恵さん(写真)は、アニメ映画監督の高畑勲さんに突き付けられた「宿題」に取り組んでいる。

福島出身学生たちの葛藤見つめる



東京で「3・11」に遭い、直接被災はしていないけれど、自分たちも「被災者」ではないのか。作品の冒頭、福島で生まれ育った学生たちは戸惑いを口にする。大河内武さん(法4以下同)と渡辺理さんは福島市、鈴木沙織さんは須賀川市、八巻さんは伊達市の生まれ。いずれも郷里は中通りと呼ばれる内陸部に位置

法4・八巻仁恵さん

「事実と向き合い懸け橋になる」

東京で日常を送るがゆえに宙ぶらりんの心を抱える学生たちに、全村避難した双葉町の女性の言葉が風穴をあける。「中通りの人には家やまちがある。状況が違うことを頭に置いて」。女性との対話で見た現実の重さを、八巻さんは「現状を理解しないままの葛藤は



被災地を取材するゼミ生

後ろめたさにならなくなった」というナレーションに込めた。今回の企画は、ゼミに動画制作を取り入れていた田村教授との面談から動き出した。被災した福島を東京から見る自分は何者なのか、福島のために何ができるのか。ゼミ生の選挙面接で八巻さんの漏らしたわだかまりが核となり、ゼミに集まった同郷の4人から構成を練り、福島でも取材。議論を重ねながら撮影を進めた。

飯館村の北西に隣接する伊達市は、特産のあんぼ柿で知られる。八巻さんの実家は兼業農家。作中、放射性セシウムの影響でそのあんぼ柿を作れず、苦悩する八巻さんの父親と友人の会話が流れる。第三者であれば「本音を引き出せた」と手ごたえを感じるどころだ。「競合するほかの産地は喜んでいと思うよ、と父が言うんですね。カメラの前で話したことだ

にとって、取材される側の感情のざわめきを知ったことは得難い経験になったことは間違いない。作品は「宙ぶらりんの自分たちにもできることがあるはず」と未来への一歩を予感させて終わる。審査委員の講評では「『3・11』とどう向き合うのか、宙ぶらりになって苦悩する姿が描かれていて」と評価される一方、アニメ映画監督の高畑勲さんからは「自分の心と向き合うことに意味はない。事実と向き合っ

てこそ作品は価値を持つ」と断じられた。高畑監督に指摘された作品の「弱さ」は八巻さん自身、感じていたこと。「事実を描こうとしたが、伝わらなかった」と悔しいと表彰式では無念のスピーチ。締め切りを前に、時間切れの形でまとめたという。被災者の現実を知る自分と、東京の消費者の視線を併せ持つ自分。立川市の西立商店街にオープンした県産品の販売店「福島応援館」を手伝うなかで、

東京国際アニメフェア

島野さんらが発表



3月21日、アニメ業界最大のイベント「東京国際アニメフェア」(3月21〜25日、東京ビッグサイトで開催)で、ネットワーク情報学部の学生が「大学生が立案したアニメ企画」を発表した。富富忠教授が担当する同学部の「コンテンツマネジメント」では、アニメーションのコンテンツ制作や企画立案、事業に至るプロセスや業務運営を学び、編み出した企画を専門家にプレゼンテーションする。そのうち5人がそのプレゼンを再発表を行い、「キャラクター紹介、展開

案、販売収益計画などを発表した。参加した専大生は▽後藤秀行さん(3年次)▽長田啓佑さん(4年次)▽大橋遼さん(同)▽栢森彩香さん(同)▽島野健大さん(同)発表順の5人。ほかに静岡文化芸術大学の学生1人も加わり計6人が発表した。富富教授、増田弘道非常勤講師、ファンワークス代表・高山晃氏、プロダクションIG・平澤直氏、ソニーピクチャーズ・五味大輔氏、LMD代表・村濱章司氏ら6人が講師を行い、「キャラクター性をどこまで掘り下げて考えるか」「原案を

ネットワーク情報学部

知らない人に内容がわかるプレゼンテーション」など専門家の視点からさまざまな指摘が出た。当日はビジネスデーで、一般が入らない業界関係者のみが参加する。約50人が学生の発表を聞いた。ポケットモンスターの新しい企画について発表した島野さんは、斬新な企画でプロモーションの方法が今の時代に即しているなどと評価された。「長い歴史を持つイベントで発表したことは、とてもいい体験。アニメ企画への視野が広がった」と語った。



かわさきワンセグの生放送「キャンパスライブ」オンエア

かわさきワンセグ 地域密着の実績認められ 4月からエリア放送局に

ネットワーク情報学部 富富忠和プロジェクトが運営するコミュニティテレビ局「かわさきワンセグ」が、4月からエリア放送局として新たなスタートを切った。約1年半にわたって大学や地域に密着した番組を配信して



きた実績が認められ、実験試験局から地上一般放送局に移行。今後は災害に強いワンセグの特性を生かし、緊急時に役立つ情報の発信にも努める。かわさきワンセグは、テレビ放送用電波の空き周波数帯(ホワイトスペース)を活用する総務省の事業の一環としてスタートした。生田キャンパスを中心に、今年3月までは連携する日本女子大とエクトリダーを務めた石川陽佑さん(4年次生)がこれまでの活動を報告。富富教授は、通信回線を利用しないため災害時でも携帯電話で視聴でき、地域独自の身近な情報を配信できるかわさきワンセグのメリットを挙げ、「川崎市の緊急放送を流すことを目指したい」と述べた。